

感覚と言葉：ヴィトゲンシュタインの「哲学研究」 二四三節～三一六節を中心に

菅, 豊彦
九州大学文学部：助手

<https://doi.org/10.15017/27462>

出版情報：哲学論文集. 4, pp.19-37, 1968-09-28. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

感 覚 と 言 葉

ヴィトゲンシュタインの「哲学研究」二四三節～三一六節⁽¹⁾を中心に。

菅 豊 彦

感覚、感情等の内的出来事を表わす言葉はどの様にしてその意味が与えられるか、あるいはそれらの言葉が内的出来事といかなる関係を持っているかということが「哲学研究」二四三節から三一六節におけるヴィトゲンシュタインの考察の主題である。

しかし彼はこの問題に対して一つの理論を提出することによってではなく、既存の理論の否定を通じて彼の考えを示している。この否定される既存の考えとは「Private Sprache」の考えと言われるものである。即ち感覚、感情等の内的出来事を表わす言葉、例えば「痛み」の意味は自分自身の内的な痛みの感覚を持つことによってのみこれを知ることが出来るという考えである。換言すれば「他人はこの（私の）痛みを感じる事が出来ない」（二五三）それ故私のみが私が痛みを持っているかどうか知ることが出来るのであり（三〇三）、従って「（感覚を示す言葉は）それを語る人にも知られることが出来るもの、即ち彼の直接的な内密な感覚を（auf seine unmittelbaren, privaten, Empfindungen）を指し示し、従って他人はその言葉を理解することが出来ない」（二四三）という、そういう仕方では言葉は感覚と結びついている。痛みを例にとれば、言葉と痛みの関係は痛みを持つことによって起る身

体的な現われ、動作の媒介なくして成立するという考えである。

この *private Sprache* の考えは特別奇妙な考えではない。これはデカルトの身心問題²⁾についての考えや、ロック以後のイギリス経験論の *idea* についての考えの内に見られるものである。又今世紀の *sense-datum theory* や *phenomenalism* によつてもこの考えは維持されている。というのはそれは事物についての知識(命題)から独立に感覚与件命題の意味を定め、そこに他のすべての事物命題の拠りどころを求めようとする試みだからである。さらに又「他人の心」に関する知識をアナロジーによつて説明しようとする試みの内にもこの考えは存する。何故なら「痛み」の意味が何であるか私自身の場合からのみそれを知っているという前提に立つてこそ、「他人が痛みを持つ」ということを自分の場合とのアナロジーに訴えて説明する必要が生じてくるからである。³⁾

さて以上の *private Sprache* の考えをヴァイトゲンシュタインが否定する場合、その議論を二つの面に分けることが出来る様に思われる。(1)まず二四四節から二五六節において感覚のプライベート即ち「私の感覚は *privat* である」と言われる場合、それは何を意味しているかを尋ね、*private Sprache* を認める人々の言う「*privat*」という概念は言語使用の混乱から生じたものであり、ナンセンス⁴⁾であることを示す。というのはヴァイトゲンシュタインに対して *private Sprache* を擁護しようとする人々の議論は多くの場合感覚のプライベートを前提にして展開されるが実はこの前提こそ *private Sprache* の思想の根源であり、ヴァイトゲンシュタインの批判の第一の標的であったのである。(2)次に二五六節以下において *private Sprache* そのものの考察に向い、仮に *private Sprache* を想像するとして、それがはたして言語として可能かどうかを尋ね、言語が言語であるための条件を満足しないということを示し、*private Sprache* の可能性を否定する。

そこで小論における以下の考察はこの二点、即ち感覚が *privat* であるということの否定と、*private Sprache* そのものの可能性の否定に因してヴァイトゲンシュタインの議論を整理し、その妥当性を吟味することに向けられる。

グイトゲンシュタインは二四六節で「私の感覚はどの様な意味で privat なのか」と尋ねる。それに対して private Sprache を認める人々は「私が実際痛みを持っているかどうかは私のみが知ることができ、他人は単にそれを推量するにすぎない」（二四六）という意味で私の痛みは privat であると答えるであろう。しかし「知る」という言葉が通常の仕方で使用されれば他人はしばしば私が痛みを持っているかどうか知っているのではないだろうか。これに対して彼等は次の様に答えるであろう。「私は私の感覚を（私の行動から）学ぶのではなく、私は私の感覚を単に持っているのである。それ故私の行動からのみ私の感覚が何であるかを学ぶ他人は、私がそれを知っていると同じ確実性でもって私が痛みを持っているということを知ることが出来ない。それが出来るためには彼は私の感覚を感覚しなければならぬが、それは論理的に不可能だからである」と

彼等の議論の論点を次の様に整理することが出来るであろう。

痛みを持つ人はそれを感じる故にそれを持っていることを知るのであり、かつ感じられることによって知られるいかなるものも他の仕方では知ることが出来ない。

しかるに誰れも他人の痛みを感じることは出来ない。

それ故誰れも他人がいかなる感覚を持っているか知る（大前提の「知る」と同じ意味で）ことは出来ない。

さて、言うまでもなく、この議論（Aと名づける）の結論に述べられた意味における private な感覚を指し示すことによって private Sprache は privat となるのである。だがしかしこの「privat」な感覚とは哲学者の造ったフィクション以外の何物でもない様に思われる。というのはこの議論 A の大前提も小前提も混乱した命題だからである。

① まず小前提が混乱しており、無意味であることを明らかにしたい。この小前提は「二人の人は同じ痛みを感じる

ことは出来ない」と書きかえることが出来る。さてこの小前提を批判してヴァイトゲンシュタインは次の様に言う。「私の痛みが彼の痛みと同じであると言うことに意味があるかぎり、我々は同じ痛みを持つことが可能である」(二五三)。ここでヴァイトゲンシュタインが指摘しているのは「彼と私が同じ痛みを持つことは論理的に不可能である」と言われる場合の『同じ痛み』という表現には意味がない、即ちこの表現は適用出来ないという点なのである。

しかし多くの哲学者はこの指摘に反対するであろう。例えばエヤーは次の様に述べている。「異なる人々が同じ思想や感情を持っているとしばしば語られることは事実である。しかしこれによって意味されているのはこれらの思想は感情が類似しているということであり、それらが文字通り(literally)に同一であるということではない」。「頭痛は private である。即ち数人の人が同じ頭痛を感じるということは意味をなさない。(不可能である)」。ここでエヤーが「数人の人が同じ頭痛を感じることは不可能である」と言う場合、ヒュームの「種的同一性」(specific identity)と「数的同一性」(numerically identity)」という区別を借りれば、数的同一性の意味で「同じ」という言葉を使用している。即ち頭痛について数的同一性を否定することが意味がある、換言すればこの場合数的同一性という概念が適用されると考えている。

しかしそれははたして可能であろうか。まずこの「種的同一性」及び「数的同一性」という概念の構造を考察してみなければならない。例えば「AとBが同じ本を持っている」と言う場合、その「同じ」の意味は曖昧であるが、一つの意味はAの持っている本はBのそれと、著者、内容、形、大きさ、色等において区別出来ないということを意味している(種的同一性)。しかし他の意味においてAとBが一冊の本を共有している場合を表すのに使われる(数的同一性)。それ故「AとBが同じ本を持っている」と言われた場合、我々は「それは数的に同じという意味か」と問い返すことが出来る。この様に本や石や時計等のいわゆる事物に関して一般に「 α と β は非常に似ている、しかし α と β は数的に同一であろうか」と尋ねることは意味を持つ。しかしあらゆる場合にこれは適用できるであろうか。例え

ば「意見」の場合を考えてみよう。AとBが同じ意見（例えば「海水浴より登山の方が面白い」という意見）を持っていると知った場合、さらにAの意見とBの意見は数的に同じかどうか尋ねることは何を意味するであろうか。その様な問はありえない様に思われる。というのはどの様な内容の意見であるかという意見の記述が意見の同一性の criteria (基準)¹⁰⁾であって、それ以外に「同じ」とか「異なる」ということは言えない様に思われる。痛みの場合も意見の場合と類似している。その痛みが鈍いとか鋭いとか、強いとか弱いとか、増大したとか減少したとか、又その場所はどこであるかということが痛みについての記述¹¹⁾であるが、私の痛みの記述が彼の痛みの記述と同じであるならば、彼と私は同じ痛みを持っており、二つの記述が異なれば二人は異なった痛みを持っているのである。即ち感覚の記述の同一性が感覚の同一性の criteria を与えるのであり、これ以外に感覚に適用されるべき「同じ」とか「異なる」という概念を我々は持っていない様に思われる。

これに対して、右の説明は痛みの種的同一性の criteria が痛みの記述の同一性であるということを主張しているのにすぎないのであって、痛みには数的同一性は適用出来ないということを証明してはいない。従って我々はやはり痛みの数的同一性を考えることが出来ると言って反論されるかも知れない。この反論者は次の様に考えているのである。即ち彼等は本の様な事物に適用される「同じ」という概念を、即ち「種的同一性」と「数的同一性」を語ることが意味がある「同じ」という概念を、この概念の唯一のモデルとすることによって、それを本などの事物とまったく異なるタイプの概念である「意見」、「痛み」のような概念に適用しようとする*。だがそこでは本などの事物との類似性は破綻をきたし、そこで「他人と数的に同一な痛みを持つことは論理的に不可能である」と主張するのである。即ち彼等は「意見や痛みが心の内に起るという点を除いては本などの様な事物と同じ対象であって、我々は自分の場合にはその対象を直接認識し記述するが、しかし他人の心に起った対象について直接的に認識することは論理的に不可能である」と考えているように思われる。

しかしこの考えは誤っている。というのには感覚の記述と言う場合、その記述は本などのいわゆる事物の記述とまったく異なる構造を持っているからである。私が自分の痛みを鋭いとか強いとか、身体などの位置にあるとか記述する場合、本などの様な事物の場合と異なり私の記述から独立に存在論的身分を持っているものを観察することによって、それを記述しているのではなく私の記述がその記述の対象の性格を決定するのである（それ故事物の記述と異なり自分の痛みの記述に関してその記述が正しいかどうかという問題は起りえないのである）。痛みの場所を述べる場合も「その痛みの場所を示す行為そのものが痛みの場所を決定する」¹²のである。^{*}即ち（数的同一性が適用出来る）本などの様な事物の場合と異なり特定の記述から離れて、一つの対象として痛みについて語ることが不可能なのである。それ故痛みの記述からはなれて私の痛みが彼の痛みと同じであるかどうかを語ることが無意味であろう。

ところがこれに対して又次の様な反論が起ってくるかもしれない、即ち確かに痛みの記述から区別された独立の対象として痛みを考えることは誤っているが、しかし痛みの記述の内において数的同一性を種的同一性から区別出来るのではないか、即ち痛みの所有者に refer することなく、性質や位置などの記述だけで痛みの同一性が定められる場合は種的同一性だけが問題なのであり、これに反して痛みの所有者に関する記述が前のような記述と一緒に同一性の criteria の本質的部分である場合は数的同一性が問題になるのである。従って、私の痛みと彼の痛みは種的には同じでありうるが数的には必然的に異っていなければならない。即ち二人の人は腕に焼けるような痛みを持つことが出来るが他人は私の焼けるような痛みを持つことは出来ない。と。しかしこの反論も誤っている。というのはもし所有者を示すことが痛みの記述に属するならば、即ち「私に属する」ということが私が持っている痛みの記述であるならば「私は焼けるような痛み」を持っていると言えらると同様に「私は私に属する痛みを持っている」と言うことが出来なければならぬであろう。しかしこのあとの文は「私は痛みを持っている」ということ以上の意味を持っていないのである。そしてこの反論においても先の場合と同様痛みを本などの事物をモデルに扱おうとする考えが潜んでいる。

しかしある本を identify し、その上でそれが私の本であるかどうかを調べることに意味があるけれども、痛みを identify した上でそれが私のものであるかどうかを調べることは意味をなさないのである。「私が痛みを持ってゐる」ということの他に「私の痛み」に意味があるとは思われ¹³ない。それ故所有者を示すことは痛み¹³の記述には属しないのである。従って痛み¹³の記述の内においても数的同一性を考えることが明らかになつたと考¹³える。二人の人がいるから二つの痛み（同じ痛み¹³の二つの例ではなく）がなければならぬと考¹³えることは同じ色に塗られた二つの領域があるから二つの色がなければならぬと考¹³えることと同様に誤つた考¹³えであらう。

以上から本などの場合に適用される数的同一性は痛みの場合には適用不可能であり、それ故「二人の人が同じ痛みを持つことは不可能である」という場合、もしその「同じ痛み」という表現が数的同一性を意味しているとすれば、その命題はナンセンスであることが明らかになつたと考¹³える。以上は言葉の未¹³に拘泥した議論の様に言われるかもしれない。しかし彼の痛みは私の痛みと異つていなければならぬという考¹³えは（もし誤つてい¹³れば）非常に重大な誤りであると思¹³われる。というのは既に示した様にこの考¹³えは「人の思考は彼の意識内において他から隔離されて（*in einer Abgeschlossenheit*）（他人が覚知することが不可能な仕方¹⁴で）生起する。」という考¹³えに通じ、これは直ちに他人の心についての懐疑論に、さらに自我論に通じるからである。

勿論我々が痛みを表情に出すまいとする場合他人にそれが解らないという意味で *privat* であると言¹³える。又彼が何を考¹³えているか我々と国籍や年令が異なるので、我々には知ることが出来ないという意味で *privat* であると言¹³える。しかし彼の痛みは私の痛みと数的に異なるから彼の痛みは *privat* であるということは（以上の考¹³察が正しければ）ありえないと考¹³える。

言葉と言と感覚

※尚、本などの事物に適用される場合を唯一のモデルにして他のすべての場合にこのモデルを無理に宛がおうとする例はヴィトゲンシュタインが指摘している様に「この」「これ」という指示代名詞の場合にも起つてくる。例えば胸の一箇所を示して「しか

し他人はこの痛みを持つことは出来ない」と主張しがちである。しかし「この」という表現は手をあげて指し示す身振りと同様に単独では対象指示の機能をもっていない。「この」という表現に伴う一般的名辞から Identification の基準を借りなければ、指示する対象を identity することが出来ないのである。ところが既に見たように「本」という一般名辞には種の同一性から区別された数的同一性の用法があり、従って種の同一性から区別するために「この本」と強調することによって数的同一性を示すことは可能であるが、「痛み」に関しては数的同一性を示す用法がない。それ故「他人はこの痛みを持つことが出来ない」と「この」を強調してみても、それはいかなる機能をも果さないのである。

※※※痛みの場所を示す場合我々はしばしば誤りを冒す、従って痛みの位置の記述が痛みの位置を決定するとは言えず、やはり痛みは記述から独立に存在する対象ではないかと反論されるかも知れない。しかしこの反論は痛みの位置と痛みの原因の位置とを混同している。例えば私がある歯が痛いといい、医者が調べたら実はその隣の歯が悪くなっていたということとは勿論ありうる。しかしこれによって私は痛みの原因の位置を誤ったとは言えるが痛みの位置を誤ったとは言えないであらう。⁽¹⁶⁾

※※※所有者の同一性を痛みの数的な同一性の criteria と考える以外に、異なる時刻に起った痛みは他のすべての記述が同じでも必然的に、数的に同一ではありえないという反論を提出する人々がいるかも知れない。しかし二つの痛みが数的に同一であるかどうか問題に出来るためには二つの痛みがどういふ場合に数的に同一とされるかという criteria が必要である。ところが他方彼等はこの criteria はいかなる二つの痛みの間にも決して適用出来ないと言張する。即ち彼等が為していることは数的同一性の概念を一方では認めながら、同時にその概念が成立するための条件を否定しているのである。

(なお彼等がこの様に考えるのは「我々はこの痛みがそれ自身と同一であるということに同一性の確固とした模範をもっている」(二一五)と誤って考えているということに依っているように思われる。)

(四)以上で「二人の人は同じ痛みを持つことが出来ない」という主張が誤っていることを見た。それ故議論(A)の結論「誰れも他人がいかなる感覚を持っているか知ることは出来ない」ということは成立しないことになる。しかし、さらにこの議論の大前提「痛みを持つ人はそれを感じる故に彼がそれを持っていることを直接的に知る」という命題も混乱した内容を含んでいる。この命題は「私は私が痛みを持っていることを知っている」という命題を含んでいる。しかしこれに対してヴィトゲンシュタインは「私は自分が痛みを持っていることを知っている、と言うことは出

来ない」(二四六)と主張する。そこで以下においてこのヴィトゲンシュタインの主張の意味を明らかにすることによって、「私は自分が痛みをもっていることを知っている」という命題が無意味な文であることを明らかにしたい。しかし先ず、ヴィトゲンシュタインがどういう意味で「無意味」とか「ナンセンス」と言っているかを述べておきたい。極く大まかに言つて、「Tractatus Logico-Philosophicus」においては、要素命題は名前の結合であり、それらの名前が何を指し示すかを知れば、我々はその命題を理解出来ると思へられていた。というのは「文はその意味を示す (Zeichen sich)」からである。ところが後期においてはこの所謂 Bild Theorie は否定され、「文を道具として見よ、そしてその文の意味をその適用 (Verwendung) として見よ」(四二一)という考えに移る。即ち、その文の使用のコンテキストとは無関係に名前の正しい結合の仕方があって、それによって文の意味が説明されるという「Tractatus」の考え¹⁸⁾に対して、後期では次の様に考える、即ちその文が使用 (Gebrauch)、適用 (Verwendung) を持っているかどうか¹⁹⁾が最も根本的なことであり、これがその文の要素が正しく結びつけられているかどのかの唯一の criterion である。それ故表現 (文を含めて) の意味とは、それがどの様な状況において使用され、どの様な機能を果すかということである。従つてある表現が意味を持たないとはその表現を述べた時に「心の中で意味の崩壊」を覚知すると言ふことではなく、その表現が他の場合において果す機能を果していないということを意味するのである。²⁰⁾

以上がヴィトゲンシュタインにおける「無意味」の意味する用法である。そこで我々がここで検討しようとするのは「私は自分が痛みを持っていることを知っている」という場合の「知っている」という表現がその機能を果しているかどうかということである。勿論次の様な場合はその機能を果している。例えば私が頭痛を他人に訴え、彼はそれは仮病ではないかと疑い「本当に痛いのか」と尋ねた場合「自分が痛いということは私が一番良く知っている」と答えたとすると、これが正当な表現であることは疑いの余地がない。ヴィトゲンシュタインはこの様な表現を拒絶するわけではない。²¹⁾ 私はこの命題によって憤慨を表わしているのであり、彼の問に対して「馬鹿なことを言うな」とい

う意味でその文を使用しているのである。

しかし議論(A)の大前提である「私は自分の痛みを知っている」という場合の「知っている」という表現は憤慨を表わす手段として使用されたものではなく、次の場合と同じ意味(のつもりで)で使用されているのである。即ち私が命題Pを知っているという場合、私は命題Pを主張する根拠を有しているということを他人に誓言する機能を果す、即ち確実性を主張する機能を果している、その様な機能を果すものとして「私は私の痛みを知っている」という場合の「知っている」という表現は大前提において使われているのである。しかしそれはその様な機能を果しているであろうか。

(1)例えば私が「今雨が降っている」と言い、同室の他の者が「それは確かか」と尋ね、私は「雨が降っていることを確かに知っている。今まで窓から外を眺めていたのだから」と言う。これは普通確実性を表わす「知る」の使用の一例であろう。この場合の「知る」の機能は「今雨が降っている」ということに關して、ある場合には誤ったり、疑わしかったりする場合があるけれど、今の場合その命題を主張する根拠を持っていてそれによって、疑いの可能性を退けていることを誓言しているのである。従って「命題Pを疑う」「Pを信じる」「Pについて無知である」「Pを知っていると思っている」という表現が意味を持つ状況において始めて、「Pを知っている」と言うことが可能なのである。ところで我々が痛いという言葉を学んではまえば、「私は私が痛みを持っているかどうか疑わしい」とか「私は痛みを持っていたことを知らなかった」と言うことは、ヴィトゲンシュタインが述べている様に(二八八)、意味をなさないであろう。それ故「私は自分が痛みを持っていることを知っている」と言うことも無意味である。即ちここでは「知る」という概念を適用出来ないのである。

(2)次に、「Pを知っている」と言えるためにはPを主張する根拠を聞き手に与えることが可能でなければならぬ。かつその根拠は当然Pと異なる命題でなければならぬ。例えば「今雨が降っている」と言うことを主張する根

拠として「今外を眺めていた」とか「晴雨計を調べた」とか言う様に。ところで「私は痛みを持っている」と言うことを主張する根拠として何を我々は挙げる事が出来るであろうか。唯一の答えは「私は今痛みを感じているから」ということであろう。しかし「私は痛みを持つ」という命題と「私は痛みを感じる」という命題は、文字の上では異っても論理的には等値なのである。これは例えば次の場合と較べることによってより明瞭になろう。「私は靴の中に小石を持っている」(P)と主張するために「私は小石を感じているから」(Q)と言うことは正当な根拠づけである。というのはそれらは独立した命題であり、Pの真はQの真を前提としないからである。換言すれば「私は靴の中に小石を感じている」という命題は「私は靴の中に小石を持っている」という命題を支持はするが、「小石はあったが私はそれを感じなかった」とか「小石を感じただけど調べてみたら無かった」と言うことが可能である。しかし「私は痛みを持ったがそれを感じなかった」と言うことは意味をなさない。それ故「私は痛みを持っている」と言うことを主張する唯一の根拠として考えられた「私は痛みを感じている」という命題は「私は痛みを持っている」と同じであり、根拠ではありえず、従って「私は痛みを持っていることを知っている」と言うことは意味をなさないことになる。²⁴⁾

(3)ところでカスタニエーダは次の様に述べている。「他人に「私は自分が痛みを持っていることを知っている」と主張することは pointless であるが故に余計なものである。……しかしこの主張の pointlessness はその主張の可解性 (intelligibility) と調和するのみならず、それを前提しているのである」²⁵⁾。このヴィトゲンシュタインの考えに対する批判は「私は痛みを持っていることを知っている」と言う場合と他の場合の相違を「あまりにも些細なものにしてしまっている」(三三九)ように思われる。例えば我々が共に窓から外を見ている場合、我々の一人が他の一人に「私は今雨が降っていることを知っている」と主張することはカスタニエーダの言うごとく pointless である。しかし今ここに居ない人に対して(例えば電話で)「私は今雨が降っていることを知っている」と主張することは決して

pointless ではありません。これに対して、「今私は痛みを持っている」という文に「私はそれを知っている」ということを附加することが可能かななる状況もない。従ってカスターニエーダの言う pointless だから余計であると言ふ説明はこの二つの違いを見落しているのである。

この二つの相違は identification の機能の相違に帰着すると思われる。例えば窓から外を見ている我々兩人の内一人が他の人に「どうして今雨が降っていることを知っているのか」と尋ねたとすれば、彼はもう根拠を与えることは出来ず、「この様に無数の水滴が落ちてくる場合を『雨が降っている』と語るよう言語を学んだからである」と答えるであろう。そしてそのかぎりにおいて痛みの場合も同じである。「何故痛いと言うのか」と言う問に対して「こういう場合に『痛い』という言葉を使うように学んだから」と答えるに違いない。しかし「雨が降っている」と言う場合、その言葉をマスターしていても、常にこの状況を「雨が降っている」場所として正しく認知しているかどうかが問題になる。即ち誤って identify することが可能である（従って正しく identify することも意味を持つ）。しかし痛みの場合、ある人がその言葉をマスターし、彼が「私は痛みを持っている」と言う場合、それが誤っていると言うことは何を意味するのか我々には理解出来ない。即ち私が感覚を identify する場合常に正しいと言うのではなく、正しいと誤っていると言うことが意味を持たないのである。

この両者の identification の相違を区別出来ず、カスターニエーダは感覚を本とか「雨が降っている」という事態と同じ構造を持っていると考えたのではないだろうか。従ってヴィトゲンシュタインが彼の批判の対象として立てている考え、即ち「私の感覚は私が他人に示すことが出来ない対象で、その対象からその記述を引きだしてくる」という考えをカスターニエーダは持っている様に思われる。これに対してヴィトゲンシュタインは次の様に批判する。「次の様にして das private Object (の考え) から免れよ、その対象が常に変化しているが、しかしあなたの記憶は常にあなたを欺いているのであなたはその変化に気付かない、と考²⁸えて」。ここで彼が我々に悟らせることを意図してい

るのはこの想定が無意味さである。というのは一体何が今あるいは常に欺かれていてと示すのであろうか。「他の何物も動かさず、それだけを回転させることのできる歯車はその機械の部分とはみなせない」(二七二)。従って「私は痛みを持っている」という言明はその言明から独立な存在論的身分を持っているものについての報告ではなく、その言明自身、叫びや痛みの身体的動作と同じく、あるいはそれらに取って変るべき感覚の表現なのである。

以上から「私は自分が痛みを持っていることを知っている」と言う命題は何故意味を持たないか、即ち「私は痛みを持っている」という文に何故「私はそれを知っている」という表現を附け加えることが不可能なのか明らかになつたと考える。

それらの命題が有意味であると主張する人々は「知る」「痛み」と言う言葉がどの様に使用されているかということ、即ちそれらの言葉の「真の文法」(六六四) (Tiefengrammatik) を見ぬくことが出来ず、それらから全然異なる「本」とか「雨が今降っている」という概念の構造をモデルにそれらの言葉を解釈するという混乱に陥っている様に見える。

ところで前節においても、「二人の人は同じ痛みを持つことは不可能である」と言う主張は、木や石などの普通の記述の対象に適用される「同じ」という概念を「同じ」という概念の唯一のモデルとすることによって、それを事物とまったく異なるタイプの概念である「痛み」や「意見」へ適用しようとするところから起つてきた混乱であることを指摘した。それ故議論Aの大前提「私は私の痛みを感じる故に私は痛みを持っていることを知っている」も小前提「私は彼と同じ痛みを感じる事が出来ない」も混乱した、無意味な命題であり、従って「私は彼の痛みを知ることとは不可能である」ということ、即ち痛みがその意味で *privat* であることは成立しないことが明らかになつたと考へる。

我々は〔一〕において、二四三節から二五六節の解釈を中心に「感覚が *privat* である」ということが何を意味するかを尋ね、*private Sprache* を認める人々の言う「*privat*」の意味は「痛み」等の感覚を表わす言語の「真の文法」を見失った混乱であることを示すことによって *private Sprache* の考えが出てくるその根源を否定しえたと考える。そこで次にヴァイトゲンシュタインの叙述に従って、*private Sprache* そのものの検討に向おう。*private Sprache* とは既に述べた様に、自分の直接的な、内密な感覚を (*auf seine unmittelbaren, privaten Empfindungen*) を指し示し、それ故語り手以外の他人には理解出来ない言葉である。従って我々は感覚に注意を集中し、言葉と感覚の関係を確立するとそこでは考えられている。感覚を表わす言葉はこの特殊な作業によってのみ意味を得るわけである。

この様な言語ははたして可能であろうか。先ず、ある言葉が言葉であるかぎり、もとのいわば *private ostensive definition* に一致した仕方で将来も使用されなければならないということが *private Sprache* が言語であるための必要条件であろう。即ち言語とは規則なのであり、言語を使用するということはその言葉の規則に従うことなのである。従ってそのためには、その言葉の規則に従うことと従っていると思っはいるが実際には従っていないこととの区別がなければならぬ。即ちその言葉を使い誤る可能性、さらにそのためには使い誤ったものを訂正することの可能性がなければならない。しかし *private Sprache* はこの条件を満すであろうか。ヴァイトゲンシュタインは二五八節で次の様な場合を考える。それは私がある感覚に記号「F」を宛がい、それと同じものの再現を記録しようという場合である。ところがこの場合私がFとして認めるものは(すべて)Fになってしまう。即ち私が記号「F」を正しく使用していることと、正しく使用していると単に思っていることの区別が全く消えてしまう。しか

し正しいことと正しいと思われる（が誤っている）ことの区別が消滅すれば正しいという概念も消滅するであろう。それ故記号が記号であるためには私が規則に従っているということの保証を私が従っているという Eindrücke（二五九）以外の、それから独立したものに訴えなければならぬ³¹。しかしそのことは private Sprache にとつては（その定義によって）不可能であると考える。

これに対してカスターニエーダは記号が記号であるためにはその記号の誤用及びその訂正が可能でなければならないという点は認める。しかし private Sprache においても私が規則に従っているという Eindrücke から独立のものに訴えることが出来ると考える。それは (a) private Objekt であり、(b) 記憶であると言ふ³²。

(a) しかしながら今私の前にある F と名づけた private Objekt に F と名づけることの正当性を、即ち過去においてそれと同じ対象を F と名づけてきたかどうかを確かめるために、その当の対象に訴えることは無意味であると考えられる。これに対してカスターニエーダは次の様な指摘をする。即ち対象は一個ではなく、多くの異なる種類の対象が共存して、その間には一定の規則的關係があるとすれば、ある対象に記号を誤って用いたということを別の対象の存在、あるいは非存在によって確めることが出来る³³。しかしこれは循環論に陥っていると思われる。というのは例えば「F」と呼ばれるべき対象と「G」と呼ばれるべき対象の間に一定の規則的關係があるということが確立されるためにはあらかじめ、記号「F」が適用されるべき対象をまさにその対象として認識していなければならないが、そのことがいかにして可能かということが本来の問題なのだからである。

業言と覚感

(b) 次に私が記号「F」を正しく使用しているかどうかを記憶によって確かめるという場合を考えて見よう。ところがこの記憶は上の Eindrücke の場合と同じであると思われる。即ち記憶に誤りの可能性がないとすると正しい記憶ということも成立しない。それでは私の記憶が正しいか誤っているかを決定するものは何であろうか、又これも私の記憶であろうか、確かにある場合にそれは可能である。例えば「私が汽車の発車時刻を憶えているかどうかあやしい時

にそれを確かめるために時刻表のページを心に思い浮べる」(二六五)ことはある。しかし「この場合最初の記憶の正しさがテストされるためには、時刻表の記憶が実際正しくなければならぬ」(二六五)とヴァイトゲンシュタインは言う。彼はここで「記憶は疑がわれるべきである」と言っているのではなく、「ある記憶の正しさを保証するために別の記憶を持っていくことは可能である。しかしもし、記憶から独立のものによって確かめられることが出来る記憶が一つもないとすると、正しい記憶とか誤った記憶という概念が無意味なものとなる」ということを指摘しているのであると考える。即ち *private Sprache* の内で持ち出される記憶はそれ自身の内に、或る記憶を正しいものとして受け入れたり、誤っているものとして排除する基準を持えないのである。

しかしそれにもかかわらずヴァイトゲンシュタインの *private Sprache* の否定は記憶に対する不信によって成立しているという考えがあり、それは重要な誤解だと思われるのでその点を明らかにしておきたい。それはウエルマン、³⁴ スターンに代表されるもので論点は以下のごとくである。正しい記憶と誤った記憶との区別の基準を要求し、記憶以外のところにその検証者を求めようとするとところに認識の *basic form* であるはずの記憶に対する不信があり、それはドクマと化した意味の検証理論以外の何物でもなく、実際の記憶及び認識についての正しい考えではない。何故なら次の様な実例に簡単な一例を考えて見よ。即ち私は腕が痒くてそれを掻いたということを記憶している。しかし今ここに私の記憶を検証する何物も残っていないとせよ。この場合私の記憶は検証され得ないからそれは認識としての価値を持たないと言う人は明らかに自分の立てた理論によって自分の *common sense* を圧倒してしまった人である。

以上のスターンの批判は重大な点で誤っていると思われる。ある箇所でスターンは非常に特殊な感覚の記憶ならばそれを疑って見ることは意味があるけれど「痛み」や「痒み」などの *well known sensation* についての記憶をどうして確かめる必要があるであろうかと反問している。だがヴァイトゲンシュタインも彼と同様その *well known sensation* の記憶を認識として受け入れるであろう。ただし大切なのは次の点である。我々がその記憶を受け入れるのは、まさ

にそれが *well known sensation* についての記憶だからである。即ち「痒い」とか「痛い」といふ言葉をどの様に、又どの様な状況において使用すべきかという知識を訓練によって既に獲得しているという理由に依るのである。

ところがヴァイトゲンシュタインが *private Sprache* の可能性を考察している場合問題になるのはこの「痒い」とか「痛い」といふ言葉にどうして意味を与えることが出来るか、それらの言葉をどうして獲得出来るかということなのである。従つてスターンは循環論に陥つていて、証明の対象になつてゐるものを前提にしてゐる。換言すれば、ある言葉の意味を既に獲得した上でその言葉即ち概念を適用して或る事実が真であると知ること、あるいはそれを記憶していること、その言葉の意味を学ぶことの間には根本的な区別があるのである。そしてヴァイトゲンシュタインの記憶の取扱ひに対する批判者達はこの点を見誤つてゐる様に思われる*。

さて以上から *private Sprache* においては私が正しく記号を使用していると思つてゐることから独立にそれを確める方法はなく、従つて記号を誤り用いる可能性がなく、それ故言語が規則であるという条件、即ち言語が言語であるための条件を満足することが出来ないということが明らかになつたと考える。

※「痛み」等の言葉の意味を獲得する場合における記憶とは次の様なものとして考えられる。

即ち我々が「痛み」等の言葉を学んだ状況、換言すればその言葉を適用するように教えられた状況と現在の状況とが同じであることを記憶しているからこそ「痛み」等の言葉を正しく、即ち教えられたルールに従つて用いることが出来るのである。しかしこの状況は公共的な観察可能なものである。(そうでなければ我々は元来その種の言葉を学ぶことが出来なかつたはずである)。

well known sensation に関して、ヴァイトゲンシュタインが容認するのはこの観察可能な *criteria* の記憶であり *private* な所としての痛みの記憶ではない。前者は「痛み」といふ言葉を適用することが出来るための前提となる記憶であり、これはその「痛み」といふ言葉を獲得した上で、その言葉を適用して何かを主張する、その根拠となる記憶とは区別されるべきである。

それ故又ヴァイトゲンシュタインの記憶の取扱ひに対する誤解、及び一般に彼の *private Sprache* の否定を意味の検証理論のドグマによつてゐると考える誤解は彼の後期の考えの中核になる *criteria* という概念の誤解に通じてゐる。即ち *criteria* (基準)と

evidence (証拠) との混同である。Frege の Sinn と Bedeutung の区別を借りれば、確かに criteria と evidence の Bedeutung は同じに一致し、又それを区別することは出来なく。しかし前者の Sinn の相違は明瞭である。と言っているのは「あるものが X である」と言うこととをそのあるものがまさに我々が「X」という記号で記述しているものであるという理由によって主張することと、即ち記号の用法、意味を与えることと、それが X であると言うことを信じさせる根拠がある、ということは全然異なる。換言すれば後者の様な、事実の確定、仮設の設定、検証といった営みと、そういう営みを可能ならしめる規準 (criteria) を明示することとは別のことである。

註

- 1) Wittgenstein: Philosophische Untersuchungen. 1953. 本文中の引用句の後の数字は本書の第1部の節を示す。なお以下 P. U. の略符号を用いる。
- 2) cf. A. Kenny: Cartesian Privacy (Wittgenstein, ed. G. Pitcher. 1966) p352—370.
- 3) cf. N. Malcolm: Knowledge of Other Mind. (Journal of Philosophy 1958) p969—978.
- 4) 「ナンセンス」については本稿 p. 27.
- 5) cf. Wittgenstein: PU § 246
- 6) A. J. Ayer: Problem of Knowledge 1956 p226.
- 7) A. J. Ayer: Can There Be a Private Language? (A. J. Ayer: Concept of Person 1963) p50.
- 8) Hume: A Treatise of Human Nature ed. Selbey-Bigge p257—258.
- 9) N. Malcolm: The privacy of Experience (Epistemology. ed. A. Stroll. 1967) p141.
- 10) criteria (基準) という概念は Wittgenstein の後期の思考の中核になる難解な概念であるが私は次の様な解釈が基本的なものであろうと考へる。criteria とはある表現をある現象に適用することが正しいか否かをそれによって判断する純粹に言語的な、即ち conventional な根拠である。それ故その表現に意味を与えるものであり、言葉の教授、学習の過程で問題になる概念である。(criteria と evidence との相違については本稿 p. 35—36)
- 11) この痛みの記述という場合、それは本来的な意味における記述と異っている。
- 12) Wittgenstein: Blue and Brown Book 1958. p50.
- 13) cf. Wittgenstein: PU. § 256. Cook: Wittgenstein on Privacy (Wittgenstein. ed. Pitcher) p286—323.

- 14) Wittgenstein. PU. p222.
- 15) Wittgenstein. PU. § 253.
- 16) cf. Wittgenstein. Blue and Brown Book. p50.
- 17) cf. Wittgenstein. Tractatus-Logico-Philosophicus 1922.
§ 2.15, 2.151, 3.202, 3.203, 3.21, 3.22, 3.221, 4.02, 4.0311. etc.
- 18) *ibid.* 2.0123-2.01231 etc.
- 19) cf. Wittgenstein. PU. § 117, § 500, § 514.
- 20) cf. *ibid.* § 117, § 38.
- 21) cf. *ibid.* § 246.
- 22) cf. *ibid.* p224.
- 23) cf. *ibid.* § 258, § 265, § 269, § 270.
- 24) cf. Cook. *op. cit.* p295.
- 25) Castañeda: Private language-Argument (Knowledge and Experience. ed C. D. Rollins. 1962) p94. cf. Ayer. *op. cit.* p95.
- 26) cf. Wittgenstein. PU. § 288.
- 27) cf. *ibid.* § 374.
- 28) *ibid.* p207.
- 29) *ibid.* 244. cf. D. Gasking: Vowels (Analytical Philosophy ed Butler) p254—269. Ryle Concept of Mind 1949 p98—99.
- 30) cf. Wittgenstein. Blue and Brown Book p24.
- 31) cf. Wittgenstein PU. § 258, § 259, § 202, § 260, § 265.
- 32) cf. Castañeda *op. cit.* p99.
- 33) *ibid.* p103.
- 34) Wellman: Wittgenstein and the Egocentric Predicament (Mind. 1959) p225.
- 35) K. Stern: Private Language and Skepticism (Journal of Philosophy 1965) p745—759.

感 覺 上 言 兼 著

(本学文学部哲学助手 昭和42年本学大学院博士課程中退・哲学)